

「ハラスメント」

職場のハラスメント撲滅講習会で講師の先生から聞いた話。ある会社でのこと、将来を担う大型新人と評判のBさんが、この春管理職Aさんの部署に配属されてきた。「艱難汝を玉にす」、若いうちに苦労を経験することでは育つのだとひとり合点しているAさんは事あるごとに難しい仕事を「有望な新人」Bさんに課した。Bさんは喜んで働いてくれているようにAさんの目には見えていた。しかし、それから半年後、Bさんは辞表を片手にAさんの前に現れた。言うまでもなくAさんは懸命に慰留したが、Bさんの決意は固く、引き止めることはかなわなかった。「あんなに『良い仕事』を担当させてもらっていた」Bさんが辞めていったのはなぜだ？ Aさんは茫然自失。Bさんと同期入社の人か、かの社員をつかまえて聞いてみた。その答えはAさんの理解をはるかに超えたものだった。Bさんは「A部長からハラスメントを受けていると悩んでいた」のである。

そういえば筆者にも思い

当たることがある。筆者の講義は、終了すると黒板は数式だらけ。学生達はその板書をノートするために必死。講義終了でこれを消さなくては困るのである。そこで、黒板付近にいる学生に、これを消してくれるように頼むと、学生たちは喜んで承諾したものである。

少年時代、放課後の学校で先生から何か仕事を仰せつかると、自分が信頼されているようであれしかったものである。時としてこれを「ひいきだ」として攻撃されたこともある。黒板消しもそういう文脈で以心伝心うまくいっていたのである。

ところがいつの時代からか、この黒板消しがうまくいかなくなる。「えっ、どうして僕がやらなくちゃならないの？」という学生が現れるようになってきたのだ。「じゃ、君でなくてもいい。そっちの君に頼むよ」。すると「えっ、なんで僕が？」などとなすりあう情景も現れるようになってきた。なるほどBさんはこういう時代の落し児なのだ。もはや「ハラスメント」のイロハから始めなくてはならなくなってきたのである。